

〔総 説〕

## 透 析 看 護 へ の 視 座

——人間と生活をみつめる看護の視点——

ナイチンゲール看護研究所

金 井 一 薫

Nursing of dialysis patients

——viewpoint of nursing care through assessing human beings and their lives——

Hitoe Kanai

〔総 説〕

透 析 看 護 へ の 視 座

——人間と生活を見つめる看護の視点——

ナイチンゲール看護研究所

金 井 一 薫

Nursing of dialysis patients

——viewpoint of nursing care through assessing human beings and their lives——

Hitoe Kanai

Key words: 看護の定義, 生活過程, もてる力, 5つのものさし, 観察の20ポイント

はじめに

長い間ナイチンゲール看護思想を研究してきた者として、ここでは「看護とは何か」を明確にすることによって示唆されるテーマを、透析看護に適応させた場合に、今、透析看護にいったい何が求められているのかという問題提起を行ってみたい。それを「透析看護への視座」と称して志向することにした。

さて、透析看護は、その活動の主軸を透析室における“透析患者の管理”から、“透析患者の生活管理”へという方向に移動させなければならない時期にあるのではないか…。この動向は、わが国全体の地域ケアシステムのあり方を反映して、看護活動の枠が画期的に在宅へと一気に拡大しつつある現実と連動している。

これまでの看護界は、病院という施設の枠の中で、医師たちの指示に従った形で、患者の治療処置業務を中心に、その活動内容が組まれてきた。従って、看護の内容は一部の看護婦の意志や希望にかかわりなく、限りなく医師的な発想で、高度の治療処置を駆使できる存在として形づくられてきたのである。こうした発想のなかからは、本来の看護の姿は描けない。おそらく、透析看護のあり方を模索していくにあたって、従来の看護の視点を延長させたところからは、そのあるべき姿は浮かんではこないだろう。従来の看護の延長線上に、より高度な技術と知識を備えようと躍起になればなるほど、それは限りなく医師の姿に近づいてしまうからである。

ここでは、ナイチンゲール看護思想をベースに、本来の看護のあり方を探り、その発想の上に立っ

て、看護婦たちが行うべき生活管理のアセスメントの方向軸を示してみたい。

1. 透析患者を見つめる看護実践の構造

まず下図を参照していただきたい。これは筆者が「三段重箱」と名付けているもので、看護の構造を図示したものである。

方法・システム
条件・状況
看護の視点・原理・本質

看護という仕事は、患者の個別の条件に合わせて、必要な看護をその都度見出し、具体的に生活過程を創り変えていくところにその専門性があるのだが、問題は患者が置かれた条件をどう“看護的に読みとっていくか”というところにある。

患者の条件・状況を看護的に判断するためには、その判断を導く思考、すなわち「看護の視点」や「看護のものさし」が必要不可欠の要素になってくる。つまり、看護婦は自らの頭の中に、看護の原理や視点を明確に描いていなければ、患者個々の条件や状況を看護的には読みとれず、行う看護に自信が持たないという結果になってしまうのである。

ナイチンゲールは、かつて『看護覚え書』の中で、「看護であるものとならないものを明確にすること」の大事さについて触れているが、ナイチンゲールの指摘に待つ迄もなく、看護という仕事の性格は、看護婦個々人の持つ信条や人生観に左右されやすいとこ

ろがあり、よほどしっかりとした“看護の視点”を持たなければ、個々の看護婦によって、なされる看護はまちまちということになりかねないのが現状である。治療処置のテクニックは統一しやすいだけに、この点を究めることがあたかも看護の力量だと勘違いされやすいのだが、看護とは本来そういうものではない。

筆者の研究テーマは、この三段重箱の底辺に当たる“看護の本質”部分を明らかにすることにあるが、ここが明確になれば、ナイチンゲールの指摘する「看護であるものとなないもの」を見分ける眼が育つことになる。

さて、透析を受けている患者の特徴は、三段重箱では真ん中の「条件・状況」に当たる。従って、透析患者の特徴さえ明らかにすれば、あとは底辺の「看護の視点」を持った頭で、その時々々の患者の状況を読みとっていけば、上段の看護方法は自ずと見いだせるはずだと理解してもらえらるものと思う。ここでは透析患者の特徴については、あらためて述べる必要はないだろうから、ずばり「看護の視点」についての見解を披露していく。

## 2. 「看護とは何か」をベースに考える

ここに筆者が最近創った看護の定義を紹介する。これは拙書『ナイチンゲール看護論・入門』をベースにして編んだものである。

「看護とは、病者の内で起こっている“自然の治癒過程”が順調に進むように、またそうしたプロセスを故意に妨げないように、その人の持てる力に力を貸すことである。そしてこの場合の力の貸し方は、生命体を取り囲む生活過程全体に働きかけて、その人が自らの力で維持、管理できない生活過程の一部、あるいは大部分を補い（代行し）つつ、その人の内の力が拡大するように援助することである」

わずか数行の文章の中に、筆者が考えている看護の方向軸をすべて盛り込んだつもりである。そしてこの視点が、つまりは三段重箱の底辺に納まるべきものなのである。看護というのは、まずは患者の生命の仕組みが順調に進むように、別言すれば細胞の作り替えが順調に、きれいになされていくように、その生命体を取り囲む生活過程・暮らしに目を向けて、その暮らし全体を健康的に整えていくことであり、これこそが看護の独自性だと認識しなければならない。

さて、この発想を透析患者のケアに応用して考えてみる。

腎臓は人体にとって必要なものと不要なものを選別する器官である。その腎臓が機能しないということは、身体全体の機能低下をきたしているとみとれる。心臓も肝臓もあらゆる臓器が影響を受け、血液の質もバランスを失う。そこで医師たちのケアが始まる。医師たちは、患者の腎臓機能の健康度を判断し、腎臓機能の衰えた腎臓そのものの代行ができる機器の開発に力を入れることにより、患者の生命過程が順調に営まれるように、直接的な支援をする。

では看護は何をするのだろうか。看護は患者の生活過程に目を向けて、その生活過程を工夫しながら、生活過程のあり方が直接生命過程を維持するのに役立つようにもっていくのである。透析患者には自立して自らの生活を営んでいる人が多い。そうであれば、看護は患者自らが自らの生活過程を健康的にととのえられるように、よい生活のあり方を具体的にイメージできるように導き、あるいは、透析室においては、生活過程の一部分を代行することによって、直接、生命過程に影響を与えていくことが仕事である。いずれにおいても問題は、その患者の残された機能や健康な力がどのように保たれているのかを判断していくことであろう。健康な残された細胞たちに、生活のあり方を通して具体的に働きかけることこそが看護なのだから…。

ところで、これまでの看護界は、患者の問題点探しに明け暮れてきたが、その発想ではどうしても症状や病名に第一の関心が向いてしまい、生活の工夫というテーマには接近できなかった。それではいつまでたっても看護の自立はない。残された健康な細胞や、これから生まれてくる新しい細胞に影響を与えるような暮らしを見いだしていくためには、これからの看護は、患者のもてる力ややる気など、つまりは良いところ探しをしなければならない。生活管理という眼を養うためには、この発想がどうしても必要である。

## 3. 看護の5つのものさし

看護の定義をさらにわかりやすく、かつ使いやすくするために、5つの看護のものさしを考案したので下記に紹介しよう。

- ① 生命の維持過程（回復過程）を促進する援助
- ② 生命体に“害”を与えない援助
- ③ 生命力の消耗を最小にする援助
- ④ 生命力の幅を広げていく援助
- ⑤ 持てる力を活用し高める援助

この5つのものさしのキーワードは、「回復過程」「害」「生命力の消耗」「生命力の幅」「もてる力」である。そして、このキーワードがもつ概念を身につけておけば、いつでも患者の状態を看護的に観察して、看護の方向を確定することができるようになる。

この中で最もわかりにくいのが、最初の「回復過程」という言葉であろう。それは日本語の持つ意味からみて、回復に向かうプロセスと理解してしまいやすいからである。この言葉は、ナイチンゲールの『看護覚え書』の序章の文章から引用している。彼女は病気についての視点を次のように語っている。

「すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程（reparative process）であって、必ずしも苦痛をとまなうものではないのである。…」と。つまり、ナイチンゲールは体内に宿っている自然の治癒力に目を向け、その自然治癒力が発動しやすいように、患者の周囲に良い条件を創っていくことが看護のテーマだと考えた。この発想が理解できなければ、看護は前には進めない。症状をどう判断するかは医師たちの仕事であるが、その症状がもたらす生活上の制限からくる苦痛を取り除くのが看護の仕事である。看護が発動することによって、生命の維持過程（回復過程）は順調に経過するはずである。ここに看護の独自性と存在価値が生まれる。

②③のものさしは、看護上の問題点をアセスメントするときに有効であり、また④⑤のものさしは、患者の残された機能や良いところ探しに、つまりは具体的援助目標の策定に有効な視点である。

また、このものさしは三段重箱の底辺に納まるものなので、対象が誰であろうと、どんな科の患者であろうと、活用可能であり、有効にはたらく。従って、透析患者への看護にも是非活用してその方向を確立して行ってほしい。

#### 4. 人間と生活を見つめる看護の眼とは

病気によって制限されている、患者の生活過程の一部分あるいは大部分をみつめて、その制限されたところを補い、かつ生命体のもつ健康細胞に働きかけられるような生活のあり方を実現する。これが看護の仕事だと理解されたことと思うので、次に、この発想をよりイメージしやすくするために、下図を説明していくことにする。

これは、人間を看護の眼で見つめるとはどのようなことかを説くときに使う図である。人間を見つめる視点においても、看護には看護らしい見つめ方があるべきである。

看護の視点で人間と生活を見つめる



金井一薫著『ナイチンゲール看護論・入門』p. 66 より

まず、人間は心と身体をもっている。この心のことを「認識」と名付け、身体の仕組みを「生命過程」と名付けた。認識は脳細胞の働きから生じ、それは外外界からのさまざまな刺激によって、個別的に作り上げられるという性質を持っている。ゆえに、ここに人間の“限らない個別性”が生じる。逆に身体の仕組みは人間として生まれてきた以上、誰でもが平等で“限らない共通性”を持つ。

【図1】は、これら認識と生命過程との間にどのような連関があるかを示したものである。つまり双方は相互に影響し合い、その日、その日の健康状態を形成している。

次に【図2】では、人間という生命体は、その生命体の周囲に生活過程というバリアを築き、その生活過程というバリアの中で身を守り、生命を形づくっているということを言わんとしている。人間は家を建てて直接外界からの刺激から身を守っているし、自然界の生物のように、直接自然界から食物を取り込んでいるのではない。排泄にしても排泄場所が決められ、自由にどこにでも排泄できるようにはなっていない。従って、こうした生活過程のあり方

が乱れれば、それが人間の認識や生命過程に影響し、結果として病気や症状となって表出してしまう。人間が他の動物と異なるのは、自ら形づくった生活自体によって自らの生命を乱してしまうところにある。

【図3】は図2と逆で、認識や生命過程の乱れが、そのまま生活過程に反映してしまうことを意味している。そしてこのことがまた、図2に戻っていったまます生命過程の乱れに拍車をかけることになる。こうして、【図1】から【図3】の悪循環が繰り返されると、結果的に人間は病気に冒される。

従って、看護的発想はここから出発する。つまり、看護は乱れた、あるいは制限された患者の生活過程や認識を、健康的にかつ創造的に作り替えることによって、乱れた、あるいは小さくなりつつある生命過程を整えていくことなのである。

これが端的に、人間と生活を見つめる看護の視点である。

### 5. ととのえるべき生活過程

では、看護的にととのえるべき生活過程とは、いったいどのようなものだろうか。生活過程は人間誰でも営んでいるので、看護者もわかっているつもりになりやすく、各々の人生観レベルで患者に接近しやすいという欠点がある。従って、専門職である看護者たちは、患者にとっての「あるべき生活過程」を共通認識し、専門的アプローチを試みていかなければならない。

現在、筆者が掲げている「ととのえるべき生活過程」には20ポイントがあり、さらに詳細にアセスメントするためには、150の生活過程評価チャート(KOMIチャート)を作成している。ここでは紙面の関係で、20の観察項目を示すことにする。

#### ととのえるべき生活過程項目

(観察の20項目)

- ① 新鮮な空気 (ventilation)
- ② 陽光 (light)
- ③ 家屋の清潔 (cleanliness)
- ④ 暖かさ (warming)
- ⑤ ベッドと寝具類 (bed and bedding)
- ⑥ 食物と水 (food and clean water)
- ⑦ 食事 (taking food)
- ⑧ 排泄 (excretion)
- ⑨ 身体の清潔 (personal cleanliness)
- ⑩ 衣と身だしなみ (clothing)
- ⑪ 運動と姿勢 (exercise and position)
- ⑫ 睡眠 (sleep)

- ⑬ あらゆる音の質 (noise)
- ⑭ 変化 (variety)
- ⑮ 会話 (taking hopes and advices)
- ⑯ 役割 (role)
- ⑰ 性 (sex)
- ⑱ 小管理 (petty management)
- ⑲ 受診・受療 (consult)
- ⑳ リズム・スピード (rhythm・speed)

項目の中で、わかりにくいと思われる表現について解説しよう。

①新鮮な空気、②陽光、③家屋の清潔、④暖かさの4項目は、その部屋の空気の質にかかわる内容である。人間はだれでも新鮮な空気を体内に吸い込まなければ生命を維持できないし、陽光に当たらなければ元気が出ない。また冷えや寒さは体力を衰えさせる。これらはすべて、健康的で自立した生活を営んでいる人間であれば当たり前前に整えられる事柄であるが、患者がこの4項目を満たそうとすれば、かなりの努力が必要なことがある。従って、特に衰弱した人々にとっては、空気は看護者によって与えられるものであるということを押さえた上で、その質の観察をすることは、看護の重要な役割の一つであると認識すべきである。

⑥食物と水、⑦食事の項目は、栄養の質に関連している。看護者が気を使って整えるべき事柄としては、空気に次いでこの栄養の問題がある。しかし食べるという行為は、その人が暮らしてきた環境に大きく左右されるので、ここに限りない食のバリエーションが生まれる。つまり、一人ひとりの個性や習慣が、見事に映し出されるのがこの食のテーマなのである。従って、食における個別性の発見は、看護者の優れた観察力によるところが大きい。

⑬あらゆる音の質という項目には、患者の耳に届く音全体が、患者の神経を消耗させないようにとの願いが籠められている。看護者の声をも含む生活音が、無意識のうちに限りない消耗を与えてしまうことがあるので、あらゆる音の質に関心を抱き、患者の生活全体を注意深く見つめていかなければならない。

⑭変化という項目では、「生活の中に変化がないことは生命力を小さくする」という事実を目を向けている。人間は、常時、変化の中でそれに適応して生きている生物である。健康人は、起床してから就寝までの間に、どれほどの変化を楽しんでいることであろう。患者や障害者のばあいは、特に、小さな変化が生命の喜びにつながるのである。看護者の創意・工夫によって、小さな変化をもたらすように配

慮することは、看護の第一歩である。

⑱小管理とは、生活におけるこまごまとした問題を、その都度解決していく能力のことを指している。生活に必要な物品をその都度補充するとか、手紙類に目を通して返事を出すなど、この小管理能力がどれほど健全かを観察することは、看護にとっては大切な事柄である。

⑳リズム・スピードという視点も、大事なポイントである。患者や高齢者や障害者、とりわけ痴呆症の方々やおそらく透析患者を含む、生命力の幅が小さくなった人々においては、生体のリズムが健康な若者に比べれば、たいへん遅いし、のんびりしている。看護者のリズムやスピードに患者を合わせようとすれば、彼らはたちまち疲れ果てたり、パニックを起こしてしまうだろう。彼らのリズムを知ることが、安心の看護を提供することになる。

以上、観察の20ポイントを説明した。日々の実践

を通して、こうした項目に関心を寄せ、患者が今、何を求めているのかを、患者側に立って見つめ、かつ看護の視点で患者の生活をとのえるとはどういうことかを、これまで以上に真剣に考えてほしい。

透析を終えて病院から帰宅した患者が最も知りたいのは、自分の生活を、今、具体的にどうすればよいかという点である。生活の細部にわたるこまごました看護の処方箋を書くこと、それがこれからの看護のメインテーマではないだろうか。そしてこれこそが、透析看護の専門性であると私は考えている。

#### 参 考 文 献

- 1) 金井一薫：ナイチンゲール看護論・入門 現代社、1993.
- 2) 金井一薫：KOMI チャート―日常ケアの実践を導く方法論―、現代社、1996.